

ユダヤ人のことば

—— イスラエルはなぜヘブライ語を公用語としたか¹ ——

上 田 和 夫*

今、イスラエルではアラブ人による自爆テロで路線バスがよく爆破されて、多くの死者や負傷者が出る度に心が痛みます。私も最近では6年程前イスラエルに行ったことがあります。その時の状況は全然ひどくなかったのですが、それでもバスに乗るたびに不安になり、降りるとほっとしたものです。イスラエルの人たちはしょっちゅうこの恐怖にさらされているわけです。この混乱は数年前、アリエル・シャロンというイスラエルの首相がエルサレムのエル・アクサというイスラム教の寺院に足を踏み入れてからにわかにはどくなりました。ほんとに泥沼ですが、パレスチナ自治政府のアラファト代表が亡くなって、今はどうなるのでしょうか。なんとか平和になってほしいものです。

さて今日は政治的なことは別として、ヘブライ語を初めとするユダヤ人の言語についてお話ししてみたいと思います。しかしドイツ語教師の私がどうしてユダヤ人の言語などに興味を持ったのかについてきっと不思議に思う方もいらっしゃるでしょうから、その理由からお話ししておきましょう。

* 福岡大学人文学部

¹ これは平成 16 年 12 月 24 日に名古屋大学英文学会のクリスマスセミナーにおいて発表した講演に手を加えたものである。招聘いただいた名古屋大学教授（兼文学部長）神尾美津雄氏に深くお礼を申し上げる。

私は京都の草深い田舎の出身です。子供の頃、私の家の前の国道9号線をよく進駐軍（アメリカ軍）のジープやトラックが走っていたことから、英語が大好きになり、それが嵩じて言語全般に関心を持つようになりました。

地元の高校を終えると高知大学へ入りました。特に深い理由があったわけではありません。比較的受験科目が少なかったことくらいです。学部は文理学部、学科は文学科というところ。「独文学専攻」は学生の間ではとても評判が悪かったため専攻者は一人だけ、つまり私だけです。といっても授業では上級生も一緒なのでたいていは3、4名というところですが。4年生になると、将来の進路を考えなければならなくなったのですが、ある日、たまたま新聞部あてに来ていた『東大新聞』を立ち読みしたことが私の方向を決定したのです。当時、マスコミにも有名だったドイツ語の山下肇先生の「ドイツ語教師が私底」というコラムを目にしたのです。それを読んで心は決まりました。「そうだ、東大大学院へ行ってドイツ語教師になろう！英語やドイツ語の試験なら何とかなるはずだ。」そして翌年何とかすべり込みました。1966年のことです。

大学院では一年目に偶然、本郷キャンパスで駒場からの学内講師として、他ならぬ山下先生が「ユダヤ系ドイツ作家論」（副題：ドイツ・ユダヤ精神史）を講義されることになっていたのは幸運でした。この山下先生との2度目の出会いが今度は私の一生の研究テーマを決めることになりました。先生は主としてハイネ、カフカについて講義されたのですが、その時、私たちはカフカの日記の中の以下のような文章を読んだのです。いや、その前に少し前置きしておきましょう。

カフカは1883年、当時はボヘミア王国の首都であったプラハの同化ユダヤ人の家庭に生まれ育ったのですが、そこでポーランドのルボフ（ドイツ語名レンベルク）からやってきた「どさ回り」のユダヤ人劇団のイディッシュ語演劇十数本（いずれも大変ユダヤ的な演劇でした）を見て自分のユダヤ人性に気づいたというわけです。一方カフカは劇団の俳優であるイツハク・レヴィとも

親しくなります。そしてカフカは1912年2月18日、プラハを発つレヴィのためにイディッシュ語詩朗読の夕べを催してやるのです。それに先立ちカフカは、前座として同化ユダヤ人の前でイディッシュ語を紹介するのです。次の文はその講演の一部です。

「イディッシュ語は、近代ヨーロッパ語のなかでは、もっとも新しい言語であって、たかだか四百年の歴史をもつにすぎず、本来ははるかに若いはずの言語なのです。それは、私たちがつかいこなせるほど明晰な言語形態を完成するにいたりませんでした。その表現は簡潔で、当意即妙です。

文法書は一冊も出版されておられません。好事家が文法書を書こうところみてはいますが、隠語というものは、たえず語りつがれる口語であり、変化してとどまるところを知りません。民衆は、隠語を文法家の手にゆだねてはおかないのです。

それは、ただ外来語からのみ、なりたっています。しかし、これらの外来語は、イディッシュ語のなかで静止することはなく、それらが移入された際の性急さと活潑さとを、なおとどめております。民族移動の嵐が、イディッシュ語のなかを、端から端まで走りぬけることもあります。ドイツ語、ヘブライ語、フランス語、英語、スラヴ語、オランダ語、ルーマニア語、さらにはラテン語さえも。こうしたさまざまな要素が、好奇心と軽率さのおかげで、一切合財、イディッシュ語の囊中にとりこまれているわけですが、諸言語をこのような状態で結合させておくことは、それだけでひとつの力業なのです。（中略）イディッシュ語はたとえばその起原をさかのばれば、中高ドイツ語が新高ドイツ語に移行しようとする、その転換期に発しています。（以下略）」『イディッシュ語について』平野嘉彦訳

これは口幅ったいようですが、語学好きの私にぴったりの言語でした。この言語は一言で言えば、東ヨーロッパのユダヤ人の言語で、中世ドイツ語を基礎にして、それにヘブライ語要素、スラヴ語要素が混淆したものなんですね。しかも文字はヘブライ文字を使って右から左へ書いていくんです。これが特に私には面白かったんですね。そしてこの言語に打ち込むようになったのですが、その後まもなくこの言語を勉強するためにイスラエルに留学したり、いろいろ本を読んだりするするうちに、ユダヤ人は古代からイディッシュ語だけでなく、いろいろな言語を使ってきたことを知ったのです。今ではイディッシュ語だけではなく、ユダヤ人が使っていたさまざまな言語に関心を持っています。

さてイスラエルは、御承知の人も多いと思いますが、1948年5月に誕生した新しい国です。かつて「パレスチナ」と呼ばれていたこの地にユダヤ人は約2000年ぶりに再び国を建設したのです。イスラエルという国の一大特徴は移民の国ということです。もちろんパレスチナには昔からここにちまですつと住み続けてきた土着のユダヤ人もいましたが、それはごく少数で、ほとんどは世界のさまざまな国からやってきています（イスラエルではそれを「帰還」と言っているのですが）。だから話されている言語も実に様々です。英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、アラビア語、ペルシア語などポピュラーなものだけでなく、ユダヤ・スペイン語とかこれからお話するイディッシュ語などユダヤ人特有の言語を含めて数十が話されています。まさに言語のるつぼですね。このユダヤ人たちがイスラエルという国を創っている訳ですが、しかし言葉がこんなにはばらばらでは国がまとまりません。そこで国語が必要になります。その国語が「ヘブライ語」ということです。このヘブライ語は古代のヘブライ語ではありません。古代のヘブライ語をもとに新しく作り直したヘブライ語なのです。この言語がなぜ再びイスラエルの言語となったかについて、他の言語、特にイディッシュ語にも触れながらお話したいと思います。

さてユダヤ人は紀元前 1000 年頃、カナン（今のイラクあたり）に古代イスラエル王国を築き、それは二つに分裂しながらも、その一つのユダ王国は紀元前 587 年（バビロン補囚）まで続いたわけですが、それ以降ユダヤ人は聖書にも使われていたヘブライ語を話す機会が減り、代わってアラム語とかペルシア語、ある時はギリシャ語などを使うようになりました。

紀元 70 年、ローマ帝国によってユダヤ人はパレスチナから追われ、世界に離散します。いわゆるディアスポラですね。それで世界各地に住むわけです。そしてそれまで細々と続いていたヘブライ語は紀元 200 年ごろには完全に使われなくなりました。以後、このヘブライ語は祈祷用とか学問用語、あるいは手紙とか、またお互いが違う言語を使っているような場合に、不十分ながら会話においても使われました²。このような状態は 19 世紀まで続きました。19 世紀の東欧やロシアではこの言語で小説や詩だって作られているんですよ。

ヘブライ語が日常語として使われない間はユダヤ人の言語生活はどうなっていたかというと、住み着いた土地の言語を話していたんですね。

今述べたように、ユダヤ人は紀元後まもなく世界のさまざまな地域に離散したのですが、非常に大きく分けると、オリエントおよびスペイン方面に行ったユダヤ人と、フランス・ドイツ方面に行ったユダヤ人に分かれます。前者をセファルディーム、後者をアッシュケナージームと呼んでいます。まずセファルディームですが、「セファルド」とはヘブライ語でスペインのことです。だからセファルディームとは「スペインのユダヤ人」ということになります。彼らは当初はオリエント世界に住んでいたのですが、7 世紀にアラブ人（当時はウマイヤ王朝）がイベリア半島に攻め込んで、そこを占領した際にアラブ人と一緒にいってスペインに住んで政界や財界に進出したり、学問や文化をも

² さらに重要なことは、どのユダヤ人共同体においても男児に対して常にヘブライ語教育がなされていたことである。

繁栄させました³。しかし 1492 年、彼らはアラブ人と共にスペインを追放されます。なぜ追放されたかと言いますと、スペインは先程述べたようにアラブ人に一時征服されてイスラム化していたのですが、8 世紀になるとキリスト教徒がそれを取り戻す運動を始めたんですね（これを「レコンキスタ」と言います。スペイン語で「再征服」という意味ですね）。カスティーリャ王国のイサベラとアラゴン王国のフェルナンドが結婚して統一されたスペイン（スペイン王国）は遂に 1492 年、イスラム勢力の最後の拠点であるグラナダ王国を取り戻し、レコンキスタを完成しました。そしてスペインをカトリック一色の国にしようとアラブ人とユダヤ人を追放したのです。但しキリスト教に改宗したユダヤ人は除きます。この人たちはコンベルソス（改宗者）と呼ばれました。それとは反対に、ユダヤ人の中には表向きキリスト教に改宗しながら実際にはユダヤ教を信じていた人間が非常に多かったんです。このような人たちはマラノ（豚）と呼ばれて軽蔑されました。そして彼らに対して異端審問所が設けられ、大変な拷問が加えられました。

ユダヤ人はスペインを追放されると初めは隣のポルトガルやオランダに逃げたのですが、その後は地中海沿岸地方、特にイスラム教国のオスマントルコに逃げました⁴。能力に秀でたユダヤ人はそこでも歓迎されました。そこでユダヤ人はまたスペインでと同様、政治や経済などの分野でユダヤ文化を開花させます。特に 17 世紀は最盛期でした。

ところで、言葉はというと、彼らはトルコに住んでもトルコ語は使いませんでした。もちろん全然使わないということではありません。ただ自分たち同士の生活では使わなかったということです。彼らはスペインで使っていたスペイン語をそのまま使い続けました。そしてそれにヘブライ語の単語やトルコ語

³ たとえば 10 世紀から 12 世紀にかけてのアンダルスではヘブライ語文法学とヘブライ文学、特にヘブライ語詩が発達した。

⁴ ユダヤ人が多く住んだ地域としてはコンスタチンチノーブルやサロニカがあった。

の単語を混ぜました⁵。文字はヘブライ文字を使いました。そうして出来たのがユダヤスペイン語（Judeo-espanyol）という独特の言語です。ちなみに、20世紀にこの言語を母語にしていた有名な文学者がいます。それはエリアス・カネッティです。カネッティはブルガリア生まれですが、のちドイツ語で著作をしてノーベル賞を受賞しました⁶。

今度はフランスやドイツ方面に離散したユダヤ人のことです。彼らをアシュケナジームと呼びます。ヘブライ語で「ドイツのユダヤ人」という意味です。彼らは初めはイタリアやフランスあたりに住んでいたのですが、のち中世（9—10世紀）にドイツに移り住みました。ドイツではキリスト教徒とも初めは仲良く暮していたと言われています。また言葉もキリスト教徒のドイツ語とほとんど違わなかったと言われていますが、ユダヤ人はユダヤ教徒ですから仲間同士では多少のユダヤ教の用語、たとえばシャバト（安息日）とか、トーラー（聖書）とかベイト・クネセツ（シナゴグ）などの用語は交えていた、つまりユダヤなまりはあったでしょうね。

しかし1215年、ラテラノで開かれたカトリックの宗教会議あたりから徐々にユダヤ人に対する差別が始まりました。たとえばユダヤ人を公職から追放したり、ユダヤ人であることを示す布をつけさせるようになったことなどです。のちにはまたゲッターが設置されて、そこに隔離されるようになります⁷。

ユダヤ人に対する攻撃がひどくなったのは11世紀末から始まる十字軍や14世紀半ばのペストの頃です。彼らはキリスト殺しの末裔だとか、井戸に毒

⁵ 他に、地域によってはイタリア語やブルガリア語、ギリシャ語、セルボクロアチア語なども混入している。

⁶ カネッティの次の文章はよく知られている。「私たち子供や、あらゆる親戚や友人に対しては、両親はスペイン語で語った。それは本来の日常語であり、もちろん古風なスペイン語であったし、私はそれを後年に至ってもよく聞いたものであり、習い覚えたそれを忘れてしまうようなことは決してなかった」（岩田行一訳『救われた舌』。法政大学出版社。14頁。）

⁷ ドイツでゲッターやユダヤ街が作られたのは13世紀末からである。なお「ゲッター」（Ghetto）という名前の起原はイタリア語の getto nuovo（新しい鑄造所）に遡るという。ヴェネチアに作られたものが最初である（1516年）。

を投げ込んだとか非難されて迫害や追放、改宗を迫られます。それに耐えきれず多くのユダヤ人が東欧に逃げました。

しかしドイツに残ったユダヤ人もいました。彼らの大部分は貧しい生活を送っていたわけですが、その中から金持ちのユダヤ人も出てきました。その一人にモーゼス・メンデルスゾーン（1729—1786）という哲学者がおりました。彼はベルリンの近くのゲッターに生まれたのですが、のち師匠についてベルリンに出、そこで進歩的なユダヤ人やドイツ人の劇作家のゴットホルト・レッシングらの啓蒙主義に影響されたのです。メンデルスゾーンは、ユダヤ人もいつまでもゲッターに留まっていたてはならない。人間としてドイツ人と同じ権利を持たなければならない。そしてキリスト教社会に出て行かなければならない。それには、一般的な教養を身につける必要がある、またユダヤ訛りのドイツ語を由緒正しいドイツ語に切り替えなければならないと考えました。但しユダヤ教は捨ててはならないというものでした。メンデルスゾーンらの考えは、ユダヤ人としてのアイデンティティが失われるのではないかと危惧する正統派ユダヤ人の反対を受けながらもユダヤ人の間に浸透します。そして多くのユダヤ人は、危惧された通り、ユダヤ教を捨てて、あたかもドイツ人のようになって活躍します。このようなユダヤ人を同化ユダヤ人と言います。ノーベル賞をもらうのはこのような人たちです。

先ほどユダヤ人は十字軍やペストによる迫害から東欧に逃げたと言いました。東欧と言ってもいろいろな国がありますが、特に多かったのはポーランド（のちポーランド・リトアニア）です。ポーランドは王国でしたが、昔から外敵に侵入されて国土が荒廃していました。また農業国で国はまだ全然発展していませんでした。そんなわけで能力のあるユダヤ人は王や領主達に歓迎されました。ユダヤ人は田舎に多く住み、ここでは「シュテトル」という小さな町を作ってユダヤ人らしい生活をしました。一方では上層部の貴族と下層部の農奴との間で活躍しました。つまり、貴族の荘園などの管理や税金のとりたてをし

ていたわけです。これがのちに恨みを買うことになります（フミエルニツキーの乱。1648年）。

ところで、言葉はかつてドイツで話していたときのドイツ語をそのまま使いました。スペインを逃れたユダヤ人がスペイン語を話し続けたことを思い出して下さい。ポーランドでは彼らのユダヤ・ドイツ語はポーランド語の影響を受けるようになりました。ポーランド語の日常的な単語もずいぶん入り込んできました。またドイツ語系の単語の一部とポーランド語系の単語の一部同士がくっついて新しい単語が生まれました。語順もドイツ語的ではなくてスラヴ的になりました。つまり混成言語 fusion language となったわけです。文字はユダヤスペイン語の場合と同様、ヘブライ文字を用いました。そういうわけで、ユダヤ訛りのドイツ語は月日が経つうち、もはやドイツ語とはかけ離れた言語となったのです。この言語をイディッシュ語と言います（イディッシュ語とは jüdisch というドイツ語から来ています、つまり「ユダヤの」という意味です）。しかしこのような過程は先ほども言いましたように、短期間に起こったわけではありません。徐々に徐々に、何百年もかかって起こったわけです。

この言語は大衆には母語（「マメロシュン」Mameloshn）として愛されました。しかし東欧のユダヤ人の啓蒙主義者（啓蒙主義者はドイツにもいましたよね。メンデルスゾーンらです。）はこの言語を「くずれたドイツ語」、「できそこないの言語」として蔑みました。そしてイディッシュ語の代りに大衆にドイツ語やロシア語を使うように奨励したり、ヘブライ語を奨励したりしました。その際、多くの啓蒙主義者（ヘブライ語で「マスクリーム」Maskilim と言います）はヘブライ語で小説や詩を書いたり論文を書いたりして、当時大衆が信奉していたハシディズム（敬虔主義）の後進性を非難し、啓蒙主義の精神を大衆に訴えました⁸。しかし大衆はヘブライ語を解しませんでしたので、結局は

⁸ たとえばガリツィアのヨーゼフ・ペルル（1773-1839）、リトアニアのアブラハム・レーベンゾーン（1794-1878）、アブラハム・マプー（1808-1867）ら。

イディッシュ語を使わざるを得ませんでした。それでイディッシュ語がますます言語としての体裁が整うという皮肉な結果になりました。またイディッシュ語の文学も発達しました。19世紀後半から20世紀前半にはすぐれたイディッシュ語作家も次々出て⁹、イディッシュ語は立派な文語となりました。またイディッシュ語による新聞や雑誌、演劇なども盛んになって全盛期を迎えます。しかし彼等の築いたイディッシュ文化はホロコーストで全滅してしまいます。

さて、19世紀後半は民族主義の世紀です。いろいろな国が独立を求めました。それに刺激されてユダヤ人社会にも民族主義がおこりました。シオニズム運動です。つまり、かつて住んでいたシオン、つまりエルサレム、ひいてはパレスチナにユダヤ人の国を作ろうという運動ですね。そこでの言語は流浪の言語であるイディッシュ語ではなく、ユダヤ人の民族語であるヘブライ語でなければなりません。そのような考えでパレスチナに向かい、そこで土地を開墾して住みつこうというグループもありました¹⁰。

一方この運動に反対の流れもありました。彼らの主張は、ユダヤ人の国家を作るなんて幻想だ。作れるはずがない。それよりもこのまま流浪生活を続けていこう。そして文化的自治を確保しよう（これを「流浪民族主義」と言います）。その時の言語はユダヤ人大衆の母語であるイディッシュ語でなければならぬというものでした¹¹。

また同化ユダヤ人もいました。これは特に西ヨーロッパ（ドイツ、オース

⁹ ロシアのメンデル・モヘル・スフォルム（1836-1917）、ポーランドのイツホク・レイブシュ・ペレツ（1852-1915）、ウクライナのショレム・アレイヘム（1859-1916）の3人は代表的イディッシュ語作家である。

¹⁰ シオニズムの先駆けはドイツのツヴィ・ヒルシュ・カーリッシュェル（1795-1874）、モーゼス・ヘス（1812-1875）とロシアのユダ・ピンスケル（1821-1891）である。東欧のシオニズムグループのうち最もよく知られているのは、1881年に起こったユダヤ人に対するボグロムを機に作られた「ピールー協会」（ロシア）である。その目標は「エレット・イスラエルでのユダヤ人の政治的、経済的、民族・精神的再生」にあった。

¹¹ これの代表的人物はアハド・ハーアーム（1856-1927）である。

トリア）に多く見られました。彼らは、自分たちはパレスチナへ行く必要もないし、国の中にユダヤ人の共同体を作る必要もない、諸民族の中に同化していけばいいとの考えでした。だから言語も土地の言語を使えばいいという考えでした。

リトアニアにエリエゼル・イザアク・ペレルマン（ヘブライ語名エリエゼル・ベン・イエフダ、1858-1922）という一人の青年がいました。彼もまた当時の民族主義に刺激を受けた一人で、シオニズム運動に熱心でした。そこで初めはパリへ行って、そのあと1881年、妻とパレスチナに船で到着しました。そしてヘブライ語をパレスチナのユダヤ人共同体の話し言葉にしようとしたのです。彼のこの考えは初めは周囲から馬鹿にされたり非難されたりしましたが、それにひるまず、ヘブライ語新聞を作ったり、幼稚園でヘブライ語を教えるよう頼んだりして普及に勤めました。また妻や子供にはヘブライ語のみで話をしました。彼の運動は聖なる言葉を日常生活に使うことに反対する正統派ユダヤ教徒たちの抵抗にも会いましたが、賛同も呼びシンパもでき次第に広まってきました。一方でヘブライ語の委員会を作って語彙を初めとしてヘブライ語を整備しました。彼は現代ヘブライ語の父として知られています。エルサレムを初めイスラエルの至る所に「ベン・イエフダ通り」があります。

シオニズム運動が現実味を帯びてきたのはテオドール・ヘルツル（1860-1904）が活動し始めてからです。彼はもともとはハンガリーのブダペストの同化ユダヤ人の家庭の出身ですが、その後ウィーン大学法学部に学びました。学生時代はかなりのドイツ愛国者でした。自分ではドイツ人のつもりだったんですね。卒業して『ノイエ・フライエ・プレッセ』（新自由新聞）というウィーンの新聞社につとめ、のちパリ特派員になったのですが、そこで目にしたドレフュス事件（1894年）にショックを受けました。フランス陸軍の砲兵大尉であった同化ユダヤ人アンドレ・ドレフュスはドイツのためにスパイ行為を行なったかどで逮捕され、公衆の面前で官位を剥奪されました。民衆は「ユダヤ人に

死を」と叫びました。特派員としてこの様子を目撃したとき、ヘルツルはユダヤ人の同化は不可能だ、ユダヤ人の国を作らなければならないと悟ったのです。以後、彼はシオニズム運動に奔走することになります。彼のユダヤ人国家（その地は必ずしもパレスチナである必要はない）を作るという考えはユダヤ人の間で初めは問題にされませんでした（特にウイーンのユダヤ人にはそうでしたが、東欧では支持を受けました。彼は40歳の若さで亡くなりましたが、ユダヤ人の国を作るという夢は彼の後継者によって引き継がれ、ついに1948年5月イスラエルが誕生するのです。

そしてイスラエルの言語は再びヘブライ語になりました。イザアク・ペレルマンの夢が本当に現実になったのですね。しかしヘブライ語がイスラエルの国語になるまでには紆余曲折がありました。すなわち東欧のイディッシュ語主義者はユダヤ人の母語であるイディッシュ語を支持しましたが、フランス系ユダヤ人連合はフランス語を支持しました。またドイツ系ユダヤ人互助連合はドイツ語を支持しました。それゆえ1910年ごろには「言語戦争」と言われる程の激しい闘いが展開されたのです。この闘いは最後にはヘブライ語派とイディッシュ語派の争いとなりましたが、ヘブライ語主義者の攻撃はずいぶん激しいものであったようです。イディッシュ語新聞を売るキオスクが襲撃されたり、イディッシュ語主義者の集会所に放火されたりしたこともありました。

ヘブライ語を蘇らせようとするヘブライ語主義者も決してイディッシュ語をしゃべれなかったわけではありません。それどころかイディッシュ語を母語とする者も多かったのです。しかし彼らはこの「流浪の象徴」「恥辱の象徴」「ゲッターの言語」であるこの言語を新しいユダヤ人の祖国の言語にはどうしてもしたくなかったのです。

この闘いは第一次大戦後には結局ヘブライ語派が勝利を収め、1948年の独立時には名実共にイスラエル（ちなみにこの名前はヤコブの別名です）の言

語となったのです。そこでは移民者のために「ウルパン」と呼ばれるヘブライ語速習講座が至る所に開かれ、ヘブライ語の普及に努めています。そういうわけで、イスラエルではヘブライ語文化があらゆる分野で繁栄することになります。しかしヘブライ語と言っても、先程述べたように、古代のヘブライ語ではなく新しい時代に対応した新しいヘブライ語です。流浪時代に使っていたイディッシュ語ではなくヘブライ語、これはドイツ語を基礎にしたイディッシュ語とは違ってユダヤ人の民族語でしたから、これがイスラエルの国語（公用語）になるのはやはり必然だったと言わなければなりません。イディッシュ語はイスラエルが生まれるまでの仮の言葉だったんですね。しかしイディッシュ語の果たした役割は本当に大きいものがあります。何しろこの言語で1000年もの間、いわゆる東欧系のユダヤ人の世俗的な文化活動がなされてきたわけですからね。それを記録した資料にはまさに膨大なものがあります。

言語学的にもヘブライ語の再生に果たしたイディッシュ語の役割は重要です。イディッシュ語には古いヘブライ語の単語が非常にたくさん入り込んでいますが、これが新しいヘブライ語にも生かされています（ついでですが、新しいヘブライ語を作るに当っては現代の生活に必要な語彙を作ることでした。何しろ語彙は大幅に不足していましたからね）。また新しいヘブライ語の言い回しの中にもイディッシュ語に影響を受けたものがたくさんありますから。

ユダヤ人はこの他にもいろいろとユダヤ人独特の言語を生み出しました。それらをユダヤ語 Jewish languages と言っています。たとえばユダヤ・アラビア語、ユダヤ・ペルシャ語、ユダヤ・プロヴァンス語、ユダヤ・イタリア語など。その特徴は共通しています。つまり、1) 元の言語の古い姿を保っていること、2) ヘブライ語やアラム語、また住んだ土地の言語の単語をたくさん取り入れていること、3) およびヘブライ文字で書くことです。この中でイディッシュ語が最も混成言語の度合いが高いのです。ユダヤ・スペイン語はスペイン

語とさほど変わりません¹²。

このようにユダヤ人は流浪の間、土地の言語を自分たちのためにユダヤ風に変形したんですね。これだけを取ってみてもユダヤ人の強烈な個性を感じ取ることができると思います（なお講演時には配付したイディッシュ語、ユダヤ・スペイン語、近代ヘブライ語のサンプルは今回は都合により省略した）。

なお註をつけるに当たっては次の文献を参照した。

Schoeps, Julius H. : Neues Lexikon des Judentums. Bertelsmann Lexikon Verlag. Gütersloh/München. 1998.

Sachar, Howard Morley: The Course of Modern Jewish History. Dell Publishing Company. New York. 1958.

Cohn-Sherbok, Dab: The Blackwell Dictionary of Judaica. Blackwell. Oxford. 1992.

¹² ユダヤ・スペイン語はもともとはヘブライ文字、特にラシ体という書体を使って書かれていたが、こんにちではローマ字で書かれる。